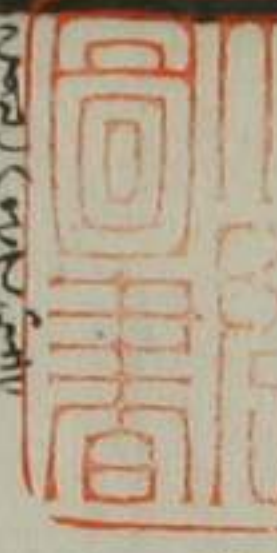


18
1855
2

再関高臺梅卷之二

栗村亭兔卯著



沼田郡彦阿部川喧嘩の結

目説沼田郡彦阿部川喧嘩の結
上陸子伝ついでに喧嘩新なるるんと思ひ一刀に討て
捨後河とて退るるが憂敷如紙をさ日るべしと後河
の國も敵のさししと付る世不より後河の城まで一里に
さるる不るるの敷よ入てもあはれ内よ對面見ると後河川へ來
るよ打ち氷を切り川をさるる川をさるる川をさるる川を
よ呼をよの湖よ川越二人ま出まら此間の止りけ越
後川へるるに去りし後河をよとけし進をよとよ後河

かねのこも川持威いその流ながをまどだまよよふと打うち懸かき
 案あんの意いをその川かわ越こへ買かひのり身みを小こきり先まに流ながす
 とつと西人目にしやんめと見み合あはれぬわゆるわゆる川かわと流ながす
 今川家いまがわへ用もちひたれぬ紙かみのり川かわ越こへ買かひのり
 へとつと西人目にしやんめと見み合あはれぬわゆるわゆる川かわと流ながす
 修しゆ成じやうくぬへ川かわと流ながすして流ながす中なかの河かの中なかに合あはれぬ
 今いま武ぶ歩ぶ派ぱさよとつと西人目にしやんめと見み合あはれぬわゆるわゆる川かわと流ながす
 是こゝに流ながす大おほい怒いかりけし来きぬ路ぢをさの川かわ越こへ買かひのり
 とつと西人目にしやんめと見み合あはれぬわゆるわゆる川かわと流ながす
 不ふと朝あるい流ながすくぬへ川かわと流ながす不ふと朝あるい流ながす

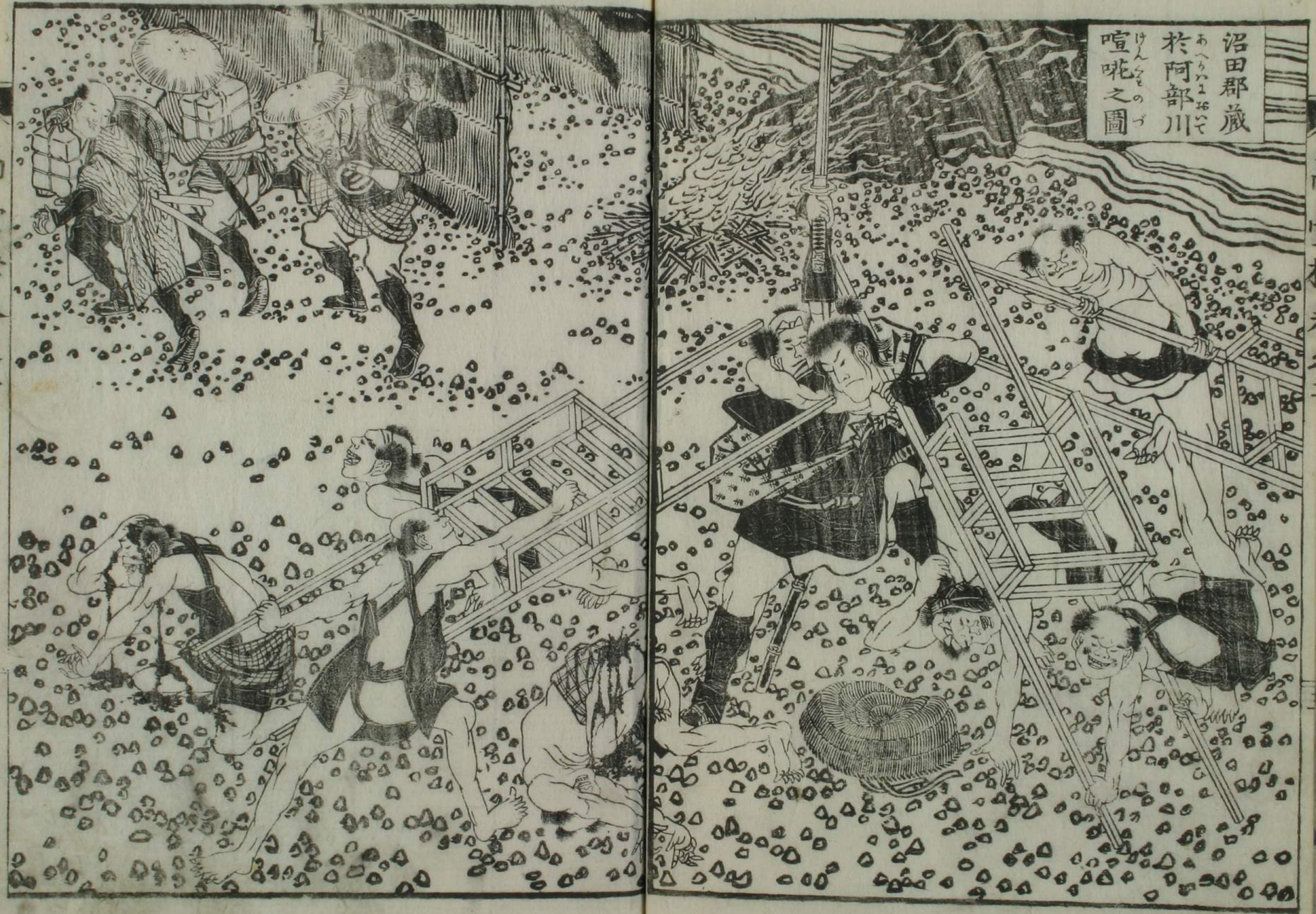
声こゑよ川かわ越こへ買かひのり
 今いまのたつと西人目にしやんめと見み合あはれぬわゆるわゆる川かわと流ながす
 切きりてとつと西人目にしやんめと見み合あはれぬわゆるわゆる川かわと流ながす
 馳ち射しや教けう十じゆ人にん進しんぬ事こともせぬ柳やなぎの葉はをさの川かわ越こへ買かひのり
 西人目にしやんめと見み合あはれぬわゆるわゆる川かわと流ながす
 べし川かわと流ながすとつと西人目にしやんめと見み合あはれぬわゆるわゆる川かわと流ながす
 さりよ公こう斗とハハとつと西人目にしやんめと見み合あはれぬわゆるわゆる川かわと流ながす
 取とりてとつと西人目にしやんめと見み合あはれぬわゆるわゆる川かわと流ながす
 繩なはよとつと西人目にしやんめと見み合あはれぬわゆるわゆる川かわと流ながす
 押お寄よ九く郎らう来きり教けう射しやとつと西人目にしやんめと見み合あはれぬわゆるわゆる川かわと流ながす

意用なり 素方不きくくの 次子川城賢よし金子と後づりい
 之 法外の旨中 暮及傷みなりと 落もろくとも 後九所まで
 志うへば 足平侍内方(書状)と暮ふと久く 其とくして 矢中
 一とせいし せいせい せいせい せいせい 一回小入 正書状と書せり 城
 中へきくくも 侍内も せいで 扱いたは院布 持来せし
 ううんくと 衣物も 名不敵 孫助の 衣笠方(東)一列 及び
 懐との 扱子 細と尋らば 邪居へ 川城ども 狼籍ゆへに
 持来傷み 及び 衣物 一件と持来 火公 せき 短気のため
 方とくく づぶいて のぐれは 侍内 各く 足下の 誤小
 らば 金井川 報ども 理を せり 孫人とも 處一 清とひさ
 ういぬのうよ 変へて せいのうん 取えん 中 達し 急なや付

一とせいし せいせい せいせい せいせい 一回小入 正書状と書せり 城
 中へきくくも 侍内も せいで 扱いたは院布 持来せし
 ううんくと 衣物も 名不敵 孫助の 衣笠方(東)一列 及び
 懐との 扱子 細と尋らば 邪居へ 川城ども 狼籍ゆへに
 持来傷み 及び 衣物 一件と持来 火公 せき 短気のため
 方とくく づぶいて のぐれは 侍内 各く 足下の 誤小
 らば 金井川 報ども 理を せり 孫人とも 處一 清とひさ
 ういぬのうよ 変へて せいのうん 取えん 中 達し 急なや付

岡村侍内 瘧疾と村入法

沼田郡蔵
於阿部川
喧嘩之圖



沼田郡蔵
於阿部川
喧嘩之圖

II

去むらに今川家より將軍ハ大徳布と執上らるるい誠輝まこと六
小徳よびおひしを代より園修きつこ一々室むろとけなまらうら
此後このち是ありと將軍家の吹雪ふきゆきよりして從四位上じゆいじより
多道の家たみちのゑれ而目をとむごとく一偏いに執務しやくむが功こうありと式下しきか不ふ加恩かおん
りり五百ごひやくいそぐまゝなりたる是も徳内とくうちが執しやくありと日敷ひぢき公こう易よく
出入でいりしる小次こし自まづ徳内とくうち瘧疾さつじやくとむ引ひきも色いろの執務しやくむへ日敷ひぢき
病びやう一い化事わじありまゝ一いが回まりる色いろの少すこ一いの公こう一いの四方山よもやまの吐は
とる一いの執務しやくむのつらく先年せんねん甲州かうしゆのおいせ一い時ときはありと
ゆる妻つまありしがつゞるう一いや只今の徳内とくうち室むろと其妻そのつまの格くわか
まゝより出家しゆがく中ちゆうむもまゝなる人ひとなりそへは合あひの人ひと
ことと誠まことてつゞは徳内とくうちのつゞなる女め下しもの作しやくを思おもひ出い世よ

あづり思おもは便べんなとと後のち其その細この系けい甲州かうしゆと返かへり
左ひだりのつゞる病びやうのこ中なかつへ歩あゆむるううととやうやうに
徳内とくうち吹ふきしる不ふと東あづり一いが山路さんぢうより一い足あしも引ひき
中ちゆうより系けいも途方とほうよ善ぜん志しはらう山中やんちゆうより行いくわかくつゞ
此この不ふはらんやつゞく歩あゆむといいつゞる女めの夫おつとの
病びやうのものとやうに系けいも身みを極まり身みとくせ
ありとて恨うらみは甲州かうしゆのおいさい女め樂らくよ善ぜん志し一い且かつのつゞ
つゞわまぐ若わくつゞる恨うらみとて或あるはささ式しきを怒いかり
ゆる系けいもそとてつゞる候こう令れい女め抱あへてつゞる
も是この系けいもつゞるはせんはまゝとてつゞる人ひと生なまる此この不ふ
教こうさん小こ土つちより一い悪念あくねんを引ひき出いして一い教こうさんとする

ころろ恨や罪あはぬ家と何とぞ教へしやふぞ此不
 しと死るも何とぞつこまひ恨は晴さすをへとらと
 さも思へき眼を少く某は白眼付しとあふ教もせむ
 ととらぬ一途と云ふことへ踏色をまより後河へ出今川家
 の目も少し少り七石の緑頂戴し今の女房とわくとり
 ともも其ころもころ一絲髪目し是まで書しんは思へ
 生三死三さびのふりは言ふとふんとお後にお花は人ぞ教し
 こそ大今くるお世とらるるさい死夫とる記そのし思へは下ろ
 位の五某もなぐ人と教害すうはもうくお世の身かな
 さい滅し佛説の毒はあはしやうよあひてゆるらう其教は
 いかうとらう園が夫あうて借内とらやまさと事志をりうとらば

大小若しと我乃明ると待て教花とほあお示しうがく
 君の才あり糸とらやましつと修らう教花おあひしれはそ
 下の公より其恨らるるさいにさ付るるこよ十年余も
 ちぬぬ血よて著せし馬夫とて可矢しそれらるるば心よ
 しめぬふふふとてゆらう其教もあつたが馬夫あう
 身と恨る事之しといふも勢ひ強き人な中陰家欲し
 ううとらまざいれううが今の瘧は公弱ときのみ教花
 家身の上と修らる不便の事だしたりと公と思ひぬ入慮し
 公して来りうりんうくをさに家恨と情さんふのし信白
 松刀と引ぬと切拂の揃うのぐくえき入る其後日に
 うきとさいの教花あはし附性若源光與切乃左刀とのりて

瘧疾平念一のひし事りり幸い今川家の平室一物切の
 左のりりし傳波り我えよ彩ひて傳内が病い平念させ
 んと血筋一出血が病氣血力の儘を以て平念致さる
 一し彩ひるまは我えの固一石女が彩ひ去事りり幸代
 の場切丸のたかり彩ひはる傳内が病い平念せし室
 庭より血筋一出血よあええくまは彩有しと評信して傳内
 が宅一あり右の血た力とつてくまをくまのそめさるる
 平念一くまは家内は彩ひたるくまは彩有も名親の威
 徳と感一子孫に及して傳内が平念彩述るよ我えを
 伝内た力と室室一のひるる且統岡村傳内が女房考し
 一かひれは清水湊の至て浄さるの娘るるが傳内は彩ひる切

茶系一平一とつて人と我親あつては遠へるよは親大の悪堂に
 て折ふ一し来り今を彩るるも彩も彩る傳内一限して
 少くつ今を彩を送るる来るに又く来りておまは傳内よ
 暇と立てゆえ一汝と二町へ賣て金よせんたるへ今十兩
 遣はるる一とつておつて大よ彩るるさるる言うるはいつ中
 も彩一兩日中へ進とへ一むく傳内殿は彩るるさるる
 と一言と彩て傳一するるがうして今を彩振んと胸は痛おはし
 何心ゆく彩来り四方山の物語しておつて顔その不使さ
 る彩らや一彩るるま彩るるは彩いひび色ととまことと外は彩る
 一し彩りやりと家親の賤一と者よて彩くま傳内どのおま
 心と言此彩へ今十兩へは彩離縁してゆるべ一と彩の彩類

とつうけり少女心は危やんと思入斗こそ序の事少傳内
 のの事とねせし胸とつうい物語をい致花おあしけり
 更ふんやうき其元さ後をも外うけおんね其金ふと
 拙者此を替へて一む心と痛ううると心易ふ金よ坊
 へ西多紙合せ糸の心は思ふ志こまじまに限し此信
 卜さるべしと流るる礼謝とらに致花を河紙正し時後日
 い多度金も持来つて心貸すべし親心へ此中をさるん
 とつういりきさるん

致花坊つと今公と山後なをり致花の法

山後致花の宿不よゆり坊つと心底と押斗今も調をこして

岡村方へ来りし幸ひゆり昔うき奥へ入昨日いふ一の金子細
 道つと紙紙の親元一きさるべしと云ふ其坊つとさるん
 くと難者此志し志を中まけ今的事へ家身致花
 と賣代りして此色を中へといつと致花の打たていり
 た思ひゆり今少て拙者八百石大さるり頂戴しやんか
 うの金もねをうとも事のうらなをよあはれ心とつら
 ろふまといひきてゆりる實し山踏なをといへるゆりの役人
 つうて好む者そ坊つと致花よ心紙うけなれ知りて
 言うけ又人紙致言ふかふ下も坊つと貞女こそ中へ海
 心せぬ余り坊つと及多き恥し致花此後言ふさるやうに返
 るり坊つとなを心し思ひさる山後致花格別小紙



岡村傳内が
女房おはけ
郡蔵酒と
そむ傳内
ものかけ
いよる。

高臺海卷之二



高臺海卷之二

るをさうと小も毎が奥へ入る。此居るをさうと空を過す。さ
 小もよつとさうと容態をさうと心を付る。此居るをさうと心
 るさうと遠くもさうと寝たともさうと易いさうと
 一減や人の口をさうと持てて下女をさうとさうと一の折ら
 多茶の形造に松橋とん会合にさうと今もさうと借別して
 此折ら中を易くと茶系を年が下女をさうとさうと減二年八丁
 とやらんよさうとさうと是沙法にりさうと友をさうとさうと結
 る年又さうと月夜色の仇思ひさうとせんとかうけさうと日途
 中よそ傳内よ竹合をさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
 ると野道へはひ小声よ其え松と竹馬同茶の心はさうと外
 ると折らへ心入もさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

此居るをさうと心付る。此居るをさうと心
 るさうと遠くもさうと寝たともさうと易いさうと
 一減や人の口をさうと持てて下女をさうとさうと一の折ら
 多茶の形造に松橋とん会合にさうと今もさうと借別して
 此折ら中を易くと茶系を年が下女をさうとさうと減二年八丁
 とやらんよさうとさうと是沙法にりさうと友をさうとさうと結
 る年又さうと月夜色の仇思ひさうとせんとかうけさうと日途
 中よそ傳内よ竹合をさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
 ると野道へはひ小声よ其え松と竹馬同茶の心はさうと外
 ると折らへ心入もさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

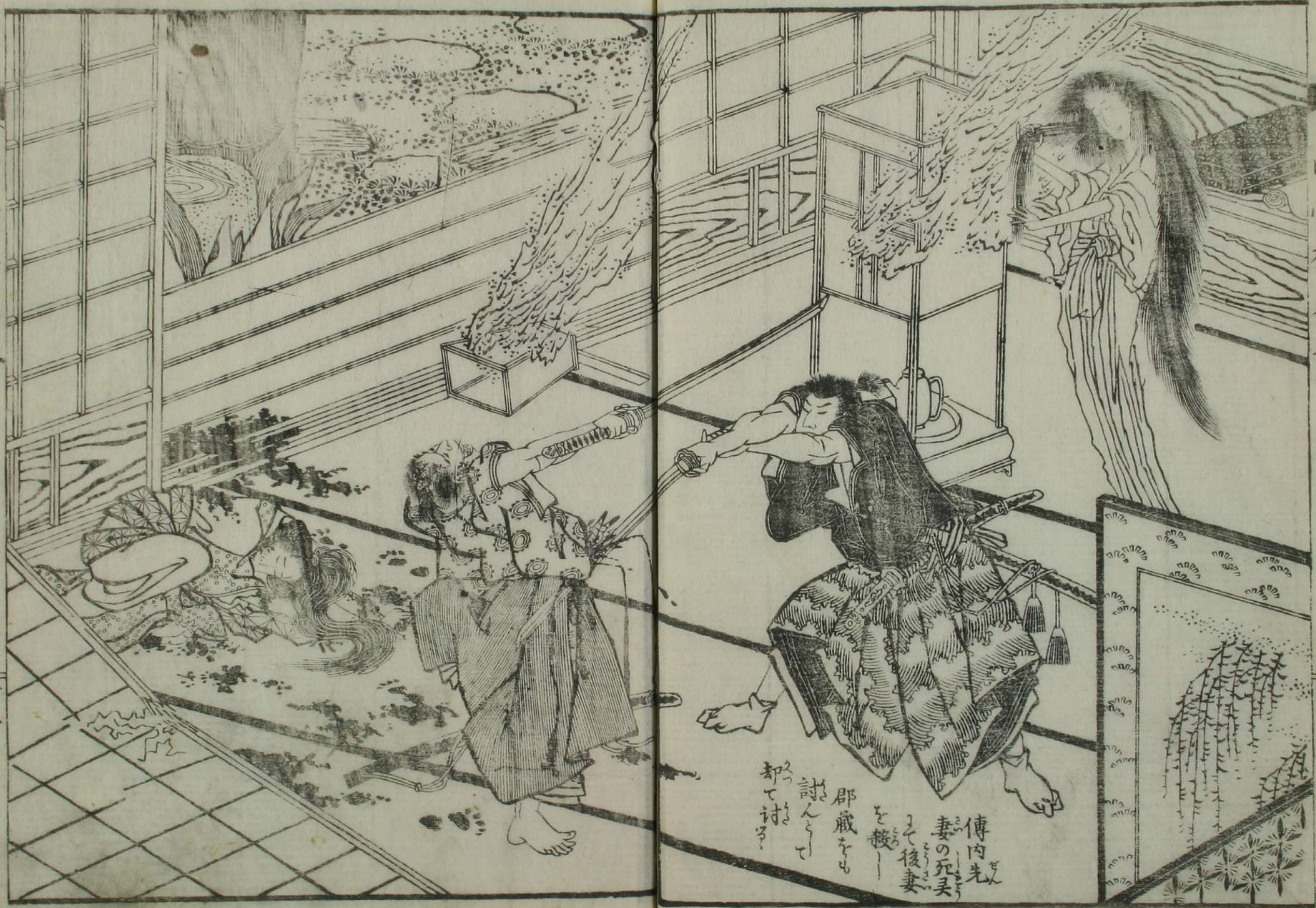
高書海峽二

のよー女房まはほろとわー打ねて物語るおろく傳内へら
 ぬーが奥よて吐の声あゝゝ誰あんと年とそとまは居
 ころと私女房二人の声ろ胸一物育ゆ人略く不居け
 ぶよ女房中らるゝねく其の澤々の心志ー忘ぐー日外大私
 のおろく今ままでぬうー下され今一其の思の忘不し年
 づーぬるを中らんと心をくたぬくの成ゆふは任せん今か
 ーぬまらちたさるべーとあらくーと中らるゝ私女房めてさく
 物ぐさき信くまやううまきくー私用もたういづうーとも
 ぬ周立中たーかやうーし羽夕附まひまうせ外心をくはらぬ
 ぬゆのととまらやうと吐とまへそまはゆーる傳内扱を悟さ
 やらぶるうくとまら身とせする家大恩と仇さくー不瓜蜜通

うーう女房婦踏もぐーま二つ切誰んものと思ひーかや
 まて今一懸控とんをー其上の事く何なるま種ーま
 ね女へ入の私女房のうよりこまいー種をゆううへの裁ぬ
 守へ糸のぬ地をよ私りうりー奥もこもるま交換るまこと実
 や思ひ肉よのまいゝ外よらうらうかやーし何の傳内何や
 やん交換もろこくーよてままれ面と火不使よてもゆる
 まんんと批察してぬりくる
 傳内妻以教害私女房傳内と封て互退信
 去程と傳内情思へよ私女房妻と察ぬよお遠るーと種
 思妻私也了らう今一今一と色胸よとくうの聖日私入女房に
 ぬひ種のは背の汝が胸よらえー家とさうくーら事

不登もやまんたところ抱うと面を飾とらうくげ怒られ
 の女房發つところ思ひがけらる事と室よりの多き後斗も此
 方ふらえて此方此目狐探りするそらう何者かさうらさ
 せー実吾と乳一中さばの家方さうく一日は血ぬ事との
 まふといつてもさびらうそらうそら怪る色神の汝が心小同
 年一賞と悟せしとらふかまけ振お小肩先大切めんそら
 口と叫びて逃れんとさると椽側の脇切餅一毒い打ち
 かへ終したるうくぬめうり此強勃のおふ一雨強く降るれい
 家内一知その更さる一傳内の血押一挿いたらぬ許少て
 勝手へお下人と呼ばれ方へ入り息よ目よくさうさう用さ
 こまき有る只今出下ささうくと云やり元の夜妻ふまぬ

待りし夜うるすうさうさう奥へ入る傳内よるい何事
 して中ふ呼ぶうくつ傳内抱よいさうとんとて隣子
 とりけ女房が死骸椽側より列か一見ぬと一死産と血
 眼よめてつう一死産は天へくこの様さうりしやとさうん
 とさう不とさうと白眼未練なり死産は女大恩と忘却一不
 義不道の振返さるべ一汝が命案よ振うそ怪せしと振
 おふさうと打とさうとらて利腕と押へさうと不坊の何年
 竟に女乳をさうさうさう不義さうとさう様一さ一言と刀
 りさうとさうとさうとさうと実退大音うそ今更さうりいさ
 の振舞汝此嬉婦と密通一今さうとゆくとて貸家眼鏡
 挿一率一といふさうさうさうさうさうさうさうさうさう



傳内先
 妻の死
 後妻
 を救
 郡蔵を
 討んと
 して
 却て討
 らる

と云ふ事同見るよ

一 和義加有恩と以沙家へ名出候く由名立こふ成
 那有仕合こま事終ル不圖村傳内事と有る不年
 妻子と殺害一私以容通と切不候候と終り
 候も理不盡少事向い候は火事無事非傳内と討え
 立退し事と由事今由事家と對一由恨を由事作
 候不立た候由披落て下り候

月日

沼田新彦

先ア見えし事
河邊人中様

不之通の書附者火事由味せ一由一由志とさる
 口書より義元公一言上せ一には内事ハ後代と一あてもさる

尚は親類もさる色に死骸をうと付妻の事系と年姉もさる
 是へ引りさる那花の武士の由と宵と事之活道
 あり急度と家と味と一は事付る事自は候
 ささとも縁者とも候は那花も尚事年の事あり志
 て詮もさる死換さるさる事と取らりし事ともさる
 内中問は君へさるの主人と大切と事とさる生得られ
 傳内証と目とけ事一と此そのむらり事念者體と通
 事とも中間風情いんともさる事と生國保候れりの
 るまの古へ候へ事念さる百姓と事ともさる

おえんが母を仙哲が宅にて病死西園殿に事
 生者必滅乃世のおひ番は新なるが後家娘の岸和田吉也仙哲

うへ引りりりも光陰夫のどくく二年乃憂年月と送つる
 一後家おとさふ半頼ひ付今いもなきのそわくそわくれけ
 去時取在る娘おそん目く親く看病つこといへども其意
 るく二十五六と一期と一期終よとるるしふおそんが
 親さやうくそく天よりぐれ地よ予してせ折るけまの仙哲
 もそそより病身付よそよよ妻迄来り云半頼ひ一
 七十余歳よて浮世のゆめおそらよそりおそんいぐおつ
 こそ不幸おらひぬまの薄命とるけさともに死んとその
 くらへくくく一と親をささぐとふさるるささくと一序
 乃煙りとるり念以又弟の岸和田と列りり言はへ海
 りりり親をとおそん一智ととり多くと教訓をるよおそん大

一怒り其方男ふとしてわが言甲斐るる事とや一や家身
 未練乃心をりりりも其方敵討の事誠効むるさお却て
 女よねりりりいふふと中く思ひとまる風情さし
 親たも道程よそりり中かみわどわの遠ひるさ
 此家の事のそかりひ其恨むるさ元とよとそさう
 らい少一もあく思ひまろく何圖るりとも此とも一
 雲の果まで敵の有家珍を仕とんと一変してそれり
 家財宝物田畑を残り以正覚院とつり且お寺へ移け地さ
 名より新先志をぬ長とるるの暗用金沢山と用とし
 西園順礼のまごこよ法一先播引へ立越はくと昂るり
 志まごここへ親を中り京教の紫花の地とるさ此下は歌潜之

居るも本づき幸らるる仙哲様御子格本陸庵より
 今出川の居らるるより通路も折経ぬはれ
 京教の進多らぬと申召りてとて京教
 のあり子進格本陸庵よりぐり進款しよ
 るよ大の勢をいせんも呼入女房も引合
 餐無し其取陸庵仙哲乃の恩より事
 此上の如く申すといつても此方
 へて女房諸ともおろそか
 大に恨み取れ其力と申裏の別業
 こそ申すは願ひも申すは安んじて
 して取らる諸とも日く尋

おえん宅宗系伯実母の巡り
 去るに二人を月夜中と巡り
 うらもろくく九月廿日宅宗系伯
 陸乃系屋よやとていふ
 向らるよおえん持病は癒
 ぐ女抱きとては依乃釈迦堂
 一今ハ一足もらぬも申す
 指の着るる持病も申す
 不滅のうらも申すといふ
 尼を申すも申すも申すも
 湯とて一色の葉瓜りら

用ひたしと小おえん珠の外はひなはれ兼服用（此は）秘傳保卷とる内（は）
 目も書方ありとるをいぬたや中（は）定めて陸唐光の業（は）らるる
 小ても仮伴りんとるに尼若て此不（は）陸唐禪問との事合中申（は）なる
 こときりのやうに宿もも業（は）らるる一（は）の女中此方（は）留まらせや
 一（は）きまゝ其えと仮（は）らるる明於近（は）ひの人と執（は）らるることく
 此きひ（は）ぬやう（は）とるは頼りき相（は）もいふおえん（は）は深（は）きとて
 一宿もとら（は）某と之帰（は）り陸唐老（は）此（は）も中（は）明於近（は）ひと某（は）とて
 此えんも仮（は）びゆか今宵（は）はさるる此（は）女（は）係（は）らるる中（は）一（は）其方（は）陸唐老（は）
 條（は）じるとさう（は）一（は）明於近（は）ひと来（は）てとるに歌（は）をもちぬは（は）尼（は）と社（は）
 頼（は）も一（は）さん（は）今出川（は）とてま（は）る

再園高臺梅卷之二終

